

氏 名 渡 邊 祐 介
 学位の種類 博士（社会学）
 学位授与年月日 2017年3月31日
 学位論文の題名 軍隊生活で精勤した学徒兵のライフストーリー研究

【論文内容の要旨】

課題

学徒兵研究において一つの‘謎’とされてきたテーマがある。それは学徒兵の多くが軍務に精勤したことである。学徒兵の精勤ぶりが‘謎’とされるのは、幅広い教養を学んでいた学徒兵ならば、戦争や軍隊に反発する心性を培っていたと考えられるのに、職業軍人顔負けの‘やる気’に満ちて軍務に勤しんだ学徒兵が多くいたためである。その‘謎’に答えようとした従来の学徒兵研究は、主に学徒兵の世界観、戦争観、死生観などの思想を考察しても、軍隊生活と引き合わせて彼らの精勤ぶりを考察する視点が不十分であった。そのため、学徒兵が軍務に精勤した理由を、学歴エリート層の思想や世代の特性によって説明してきたが、彼らの精勤ぶりはそれだけでは説明できない。学徒兵研究は、学徒兵の観念的な思想から軍隊生活での具体的な生き方へと分析の対象を転換することで、高学歴の若者が陥った、軍隊生活に潜む戦争協力のための心理的・社会的メカニズムに改めて気づくことができる。

本研究ではインタビューを通じて再構成した三名の生還学徒兵のライフストーリーに基づき、これまで不十分にしか解明されてこなかった軍隊生活における学徒兵の精勤ぶりの‘謎’にアプローチすることを課題とする。そこで明らかにする点は、学徒兵の「若者らしい生き方」が戦争を支える‘下からの力’として回収されてゆくメカニズムである。具体的には、熱心に軍務に励み、受動的な役割遂行ではなく創造的な役割遂行を可能にした心理的・社会的な諸メカニズムを解明する。こうしたメカニズムの解明によって、結果として学徒兵が‘下からの力’として戦争を支える役割を担ったことを明らかにする。また、高齢となった生還学徒兵が全人生を総括する〈いまーここ〉において、自身の戦争体験とどのように向き合っているのかを明らかにすることも、本研究の課題である。

章構成

本研究論文は、序章で研究課題を明らかにした後、各章で次のことを論じる。

第1章では、社会調査法における本研究のライフストーリー・アプローチの位置づけを行い、インタビューに基づくライフストーリー・アプローチのメリットを述べる。続いてインタビューの概要、語り手の人柄、語り手の社会的属性を紹介し、個性ある語り手を対象とするインタビューの限界性も述べておく。さらに、ライフストーリーを再構成・分析する方法とその理論的視座について述べ、最後に本研究が扱うライフストーリーの「信頼性」・「妥当性」・「代表性」を検討する。

第2章では、一般的な学徒兵イメージを検討する。『きけわだつみのこえ』の社会的な反響は、その後‘わだつみ’イメージとして学徒兵研究にも影響を及ぼしてきた。学徒兵についての科学的イメージを洗練するために、‘わだつみ’イメージを含む学徒兵についての一般的イメージを検討する。

第3章では、学徒兵研究を、①学徒兵の思想に注目した研究、②学徒兵の人間類型に注目した研究、③学徒兵のライフストーリー研究に区分して概観し、学徒兵の軍隊生活での生き方に注目する本研究の独自性を学徒兵研究史のなかで明らかにする。

第4章では、椰子実氏のライフストーリーを考察する。椰子氏のライフストーリーは、戦時中の自らの生き方を、「時流に流された」と、どこか突き放したように語った戦争体験である。「時流」という言葉で彼が反省的に総括しているのは、戦時社会の思潮と制度の圧倒的な影響力・支配力である。こうした社会的な力と、彼はどのように向き合って生きたのが明らかとなる。

第5章では、神田広志氏のライフストーリーを考察する。神田氏のライフストーリーは、戦争や軍隊に、疑問や反感を抱いていたにもかかわらず、入営後は次第と‘やる気’に満ちて海軍将校となっていった過程を、自信に満ちて語った戦争体験である。彼の‘やる気’とは、戦時体制という社会システムのなかで、少しでも居心地のよい社会的地位を目指し、軍隊生活の課題・問題にポジティブに対処していった実践である。軍隊生活を懐古できる生き方とはどのようなものであったのかが明らかとなる。

第6章では、森岡嵐氏のライフストーリーを考察する。森岡氏のライフストーリーは、合法的に兵役を逃れるために中国へと渡り、社会人時代にマルクス主義を学ぶことで反戦反軍思想を培い、臨時召集後に目撃した日本軍の「腐敗」ぶりを語った戦争体験である。思想信条に反する侵略戦争を遂行している軍隊に組み込まれ、彼は反戦反軍思想を強めてゆくが、日々の軍隊生活では精勤して過ごしていた。こうした二面的とも言える生き方とは、どのようなものであったのかが明らかとなる。

結章ではまず、学徒兵の精勤ぶりの‘謎’にアプローチするという課題に回答するために、戦争体験を一般化する方法について検討する。続いて、各ライフストーリーを統合的に考察し、三名の語り手たちが軍務に精勤したメカニズムの一般化を試みて結論とする。なお、彼らが自身の戦争体験とどのように向き合っているのか、その反省を明らかにする課題については、第4章から第6章のそれぞれで、彼らなりの反省に触れる形で回答する。

結論と意義

本研究論文では、3名の生還学徒兵の少年時代・学生生活(社会人生活)・軍隊生活のライフストーリーを再構成した上で、彼らの「若者らしい生き方」が戦争を支える‘下からの力’へと回収されていった主要なメカニズムについて考察した。軍隊生活における彼らの生き方は大きく異なっているが、統合的に考察した結果、軍務に精勤することを可能にした心理的・社会的メカニズムとして以下のものを析出することができる。

- ① 若者は生命の危機にさらされる状況でも生還できると期待するとき、日常生活で直面する困難な課題・問題に前向きに対処することができる。
- ② 若者は主観的に所属集団の‘よりましな居場所’と位置づけたポジションに移動できるよう精勤する。
- ③ 若者は所属集団に‘よりましな居場所’を得て日常生活も安定してくると、他者が期待する所属組織での自己の役割を果たそうと精勤するようになる。
- ④ 所属集団では折々に‘楽しい出来事’があり、若者が任務に精勤する上での‘潤滑油’として作用する。
- ⑤ 若者は任務に精勤することを習慣化・日常化し、そうした日常生活を自明視するようになる。
- ⑥ 日常生活における‘なけなしの自由’を求めて自分らしく生きようとする若者は、ささやかな創意工夫をして日々の任務に精勤する。

このように、それぞれ個性ある三名の生還学徒兵は若者としてごく当然の生き方をする中で、図らずも軍務に精勤し、戦争を支えていた。これが三名の生還学徒兵のライフストーリーから導出した本研究の結論である。

本研究は学徒兵の生活史的な側面、特に軍隊生活での生き方の考察を突き詰めた結果、歴史的清算の済んでいない、「若者らしい生き方」が戦争を支えてしまうメカニズムを明らかにした。行為者の視点から、当事者にとって有意義に関連づけられる社会的世界の諸相をライフストーリーとして可視化し、個人が戦時社会の‘小さな歯車’となってゆく軍事化の社会過程を描いたことに、本研究の戦争社会学的な意義がある。また、本研究は先の大戦における学徒兵の‘優秀な兵士’としての側面を、普遍的な「若者らしい生き方」にまで立ち返って、今日の私たちの生き方に引き付けて再構成した点に、学徒兵研究としての意義がある。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、3名の学徒兵体験者に幾度ものロングインタビューを重ねたうえで、ライフストーリー研究の手法で、

学徒兵が軍務に精勤するに至ったメカニズムを丁寧に解き明かしたものである。戦後の戦争体験論史から軍事史研究まで、じつに広く目配りし、重厚な史的理解に基づきながら、軍務をめぐる当事者の意識を立体的に描き出している。その結果、過度に図式的な説明に陥ることなく、矛盾に満ちた学徒兵の思考様式を再構成しつつ、学徒兵の「若者らしい生き方」が戦争を支える「下からの力」として回収される力学を析出している。

その意義は具体的には、以下の点としてまとめることができる。

- ・これまでに語られてきた「反戦」的な学徒兵像でも「殉国」志向の学徒兵像でもなく、彼らが軍務に精勤する営みに着目し、戦争遂行を「下から支える」彼らの「マイクロ」な生き様を精緻に掘り起こしている。
- ・従来の学徒兵研究は、彼らの思想性に注目する研究が多かったが、本研究は学徒兵の軍隊生活での「日常生活」に焦点を定め、彼らの軍務への精勤を生み出す社会的要因をていねいに考察している。
- ・長時間にわたるロングインタビューを通して、従来の学徒兵研究ではほとんど語られていない当事者の矛盾含みの思考様式を掘り起こしている点で、学問的な意義が大きい。当事者に聞き取ることが可能な最後の機会であることを考えても、貴重な学問的記録である。

審査者はいずれもこれらの点を高く評価し、出版することで成果が広く社会的に流通することの意義についても多く語られた。ただ同時に、以下のような疑問や課題も提示された。

- ・軍務に精勤したメカニズムとして「生還への期待」「よりましな居場所の模索」「精勤の習慣化」などが挙げられており、そのこと自体は意義深い知見だが、組織内の報償・昇進システムや社会的な集合圧力など、組織・制度・社会に起因する要因についても、より具体的な説明がなされてもよかったのではないか。
- ・日本の学徒兵が置かれた状況は、他国のそれと比べてどのように位置づけられるのかについても検討がなされたほうがよかったのではないか。
- ・学徒兵研究をめぐる意義については説得的に記されているが、近年の戦争をめぐる社会学全般のなかでの位置づけを、もっと積極的に示すこともできたのではないか。

とはいえ、これらを考慮してもなお、上述の学問的意義には大きなものがあり、ライフストーリー研究や戦争社会学として、新たな視角と研究領域を拓く研究であることは明らかである。先にあげた問題点についても、ひとつの博士論文にすべてを盛り込むというよりは、今後の課題として、新たな一書として取りまとめられるべきものとも言える。これらの点を鑑み、公聴会と論文審査の議論により、審査委員会は本論文が博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。

【試験または学力確認の結果の要旨】

本論文の公聴会は、2017年6月27日（火）10時40分から12時10分まで、産業社会学部大会議室にて行われた。

申請者は、2017年3月に社会学研究科博士課程後期課程を満期退学し、2017年4月より研究生として在籍している（旧課程の院生なので、今後の審査をもって2017年3月学位授与が遡及適用される）。

本研究に関連する業績としては、『日本オーラル・ヒストリー研究』等の査読付き邦文ジャーナル（単著）2点、『立命館産業社会学論集』での掲載論文2点があるほか、日本オーラル・ヒストリー学会などで、複数の学会報告を行っている。以上のことから、当該論文に関連する研究業績の十分な蓄積が認められる。

審査委員会は、申請者の経歴ならびに業績の評価により、申請者が十分な知識と学識を有していること、外国語文献の読解においても十分な能力を備えていることを確認した。したがって、本学学位規程第18条第1項に基づいて、博士（社会学 立命館大学）の学位を授与することが適当であると判断する。

審査委員

- (主査) 福間 良明 立命館大学産業社会学部教授
- (副査) 権 学俊 立命館大学産業社会学部教授
- (副査) 宝月 誠 元立命館大学産業社会学部教授